



「学部年表」をまとめて

添田, 久美子

(Citation)

研究論叢, 7:99-99

(Issue Date)

2000-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008619>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008619>



「学部年表」をまとめて

添田久美子*

私は、神戸大学教育学部に1981年に入学し、その後、神戸大学大学院教育学研究科で修士課程を終え、現在神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程に在学しているという、経歴をもっている。学部から数えるとなんと20年もこの大学・学部に関わりをもっているのである。そういう私であるから、かなりこの学部のことは詳しいと自負していたのであるが、この度「五十年史」の年表をまとめる作業では知らないことが続出した。

学部年表作成では、これまで『神戸大学教育学部沿革史』（1971年）でまとめられたものがある以外にはまとまったものがなかったため、教授会記録に当たり作業を進めた。もちろん教授会記録を見るのは私にとって今回が初めてであり、どんなことが書いてあるのか興味津々というところであった。

1949（昭和24）年に神戸大学教育学部になった当初から1992（平成4）年発達科学部に移行するまでの教授会記録まで44年分をとおしてみるとかなり違いが感じられる。1949年からしばらくの間は、教授会記録といえども紙不足のためさまざまな用紙が使われており、なかには、裏紙を使ったものまであった。また、ガリ版刷りも行われず、手書きのままの記録がつづられている。記録の様式もまちまちで、記録者の個性とともに、当時の教授会の雰囲気も伝わってくる。その後、60年代頃になると、様式も整って、見やすくなるのであるが、それとともに、教授会での生々しい議論のようすが感じられなくなってくる。それでも、ところどころに、論争となった議題についての詳しい記録や資料が綴じ込まれており、教育実習改革や大学院設置についてなどの貴重な資料もある。しかし、70年代後半になると記録が様式化され、読んでもあまり興味が沸くものではなくなっていった。

このような記録としての違いを些少しいうと、創設当初の教授会における議論は非常に学術的にも深いものであり、興味深いものであった。新設となった教

育学部をどのように作り上げていくのか、教員養成の理念と現実の狭間で苦悩するようすがよくあらわれている。また、創設当初から70年代始め頃までは、学生運動などがありながらも、教官と学生が、「こぢんまり」とまとまって、教官の視野にひとりひとりの学生の顔があるという、現在では感じられない暖かな雰囲気を感じられる。

物質的充実と精神的充実が異なるということは個人についてはよく言われることであるが、この度44年分の教授会記録を読んで、創設当初からみれば校舎も設備も驚くほどに充実したが、教官と学生の学問的・精神的充実という面でははたしてどれだけの進歩があったのであろうかと考えさせられてしまった。現在もさまざまな大学・学部改革がすすめられているが、創設当初の雰囲気が少しでもみなさんに伝われば幸いである。

* 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程